

# 現場へ!

## 元都庁マンが描く 駅前整備

### 再開発 変わる東京・石神井4

東京23区の西北部にある練馬区では2020年12月、区市計画審議会が石神井公園駅周辺の商業地区の規制を緩めた。それまで原則35階までの建物しか建てられなかったが、2千平方メートル以上の敷地があれば100階の高層建築物を

建てられるようになった。野村不動産や前田建設工業が関与する準備組合の再開発計画だけでなく、「いくつもの100階級のビルが建つ」と区は想定する。主導したのは、区長の前川耀男(76)である。準備組合が設立され

た翌月の14年4月、区長選で当選した。鹿児島出身。東大卒。自らも練馬区に住んで30年になる。前区長の急死に伴い、自公両党に拒まれて立候補した。元は都庁マン。「福祉行政をや

政が素晴らしいと思ってきましたね」。1971年、入庁した。障害者ら福祉の現場にかかわり、恵まれない子供を養育する里親制度の創設などに取り組んできた。

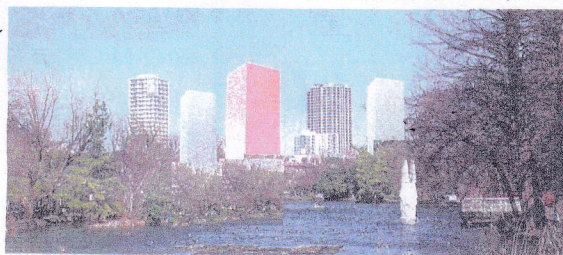
続く鈴木(後一知事)都政で現場を離れ、中核部門に移ると「俺って意外に向いているな」と自分でも驚いた。臨海副都心の開発部長時代は、バブル崩壊後の臨海開発の立て直しに尽力する。

財政難のなか人事部長に就くと、知事に当選したばかりの石原慎太郎に報酬削減をお願いした。石原との初仕事だったが、「あの方は他に報酬があるので意外にスムーズにいきました」と笑う。



インタビューに答える練馬区長の前川耀男

石神井公園から駅の方を眺めると、こんな風に超高層ビルが林立するかもしれない(石神井まちづくりの談話会の清水正俊作成のイメージ画像)



石神井公園の三宝寺池。真夏でも池のまわりは涼しい

大変なのは、その後だった。石原の秘書出身の副知事とぶつかった。当時の都議会野党関係者は「石原都政の公私混同を排し、都

府の規律維持に努めた人」と前川を評価する。その足跡をたどると、福祉に熱心な気骨ある都庁職員という姿が浮かぶ。

その半面、「練馬区が遅れているのは都市インフラ。都市計画道路の整備率が致命的に遅れている」と、前川は力説する。関東大震災後、後藤新平内相が東京に環状道路など幅員の広い道路を建設する復興計画を立てたが、中途半端に終わった。戦後は戦災復興院が同様の計画を立案したが、財政難から実現しなかった。

この時に構想された道路が東日本大震災後、防災などを名目にして都内各地で建設が進んでいる。都市開発畑を歩んできた元都副知事の青山(分)は「名古屋や仙台は自動車時代に備えた大きな道路が造れたのに、東京はできなかったんです」と指摘する。

区長転身後の2015年にまとめた「みどりの風吹くまちビジョン」では石神井公園駅周辺の道路計画とともに再開発促進を盛り込み、後に準備組合に2億5千万円の補助金を支出し「練馬駅や石神井公園駅など拠点整備が必要です。ペンシルビルの林立のような乱開発は避け、計画的な開発にしなければならぬ」と持論を述べる。

「100階程度のビルは何本か必要ではないでしょうか。商業と住宅の中心拠点をづくり、それによって周辺に緑を残したいんです」。タワーマンションに道が開かれた。

敬称略  
大塚晴明

朝日新聞夕刊に5回シリーズで 令和3年8月19日号に掲載されました。